



10:11 さらに、祭司がみな、毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえを繰り返し献げて、それらは決して罪を除き去ることができませんが、

10:12 キリストは、罪のために一つのいけにえを献げた後、永遠に神の右の座に着き、

10:13 あとは、敵がご自分の足台とされるのを待っておられます。

10:14 なぜなら、キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって永遠に完成されたからです。

10:15 聖霊もまた、私たちに証しておられます。というのも、

10:16 「これらの日の後に、わたしが彼らと結ぶ契約はこうである。——主のことは——わたしは、わたしの律法を彼らの心に置き、彼らの思いにこれを書き記す」と言った後で、

10:17 「わたしは、もはや彼らの罪と不法を思い起こさない」と言われるからです。

10:18 罪と不法が赦される場所では、もう罪のきよめのささげ物はいりません。

10:19 こういふわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます。

10:20 イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。

10:21 また私たちには、神の家を治める、この偉大な祭司がおられるのですから、

10:22 心に血が振りかけられて、邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われ、全き信仰をもって真心から神に近づこうではありませんか。

10:23 約束してくださった方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白し続けようではありませんか。

10:24 また、愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか。

10:25 ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合ひましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。

イエス様はご自身を「永遠のいけにえ」としてささげ、神の右に着かれました。それは父なる神と同じ地位である、すなわち神そのものであられるということです。それは「敵がご自分の足台となる」ときまでであり、全能の主の目からは全宇宙もまた霊的領域も変化しているということです。

主の十字架を受け入れた者は「聖なるものとされる」ことが目的ですが、それは人間的な修養努力による頑張りだけの力ではなく、「一つのささげもの」すなわち、イエス様ご自身の十字架と復活の力によってであり、また今も神の権威をお持ちである御子イエス様の権能によるのです。

ヘブル書の著者、また初代教会の指導者たちがこにあるような真理を確信するにいたったのは、イエス様の教えと旧約（特に神殿での祭儀）を十分に吟味したことによります。その上で聖霊による理解です。15節から聖霊の証しが書かれていますが、それもまた聖書にあるものです。すなわち聖書と聖霊とは切り離すことができないのです。聖書は神のことは、聖霊は神ご自身です。そのような信仰生活を送りましょう。

ところで、「これらのことが赦される所では、罪のためのささげ物もはや無用です。」とあります。主の十字架によって赦された私たちにはただ十字架だけが必要十分であるということを銘記しましょう。そして何かあるごとに、必ず主の十字架のもとに行き、十字架を根拠として祈り

解決しましょう。

聖所とは、これまで述べられてきた、聖なる神のおられることです。幕屋や神殿が、そこに入るためには、罪赦されるための身代わりの血が必要でしたが、「イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができる」ようになりました。このイエス様が「新しい生ける道を開いて」くださったからであり、また偉大な祭司としてとりなしてくださるからです。

著者は「真心から神に近づこうではありませんか。」「希望を告白しようではありませんか。」「愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。」と勤めています。どれも大祭司であるイエス様が贖いをなし、今もとりなしていただくからこそです。

また「いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」とあります。クリスチャンは一人では本来の歩みができないものです。励ましが必要であり、また人間関係の難しさの中で成長できるものなのです。何よりも大祭司であるイエス様のもとで、神と交われるのですから、イエス様のもとに集まるのです。主の礼拝に集まることはクリスチャンの生命線です。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたとの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

